

ずいそう

ペットとの暮らしを考える

佐藤和郎



我が家に初めてペットを迎え入れたのは、もう二十数年も前のことである。庭先に迷い込んだ子猫が、日向を背に芝生の上で無心に自分の身体を舐めている。小さな三毛猫だ。飼い主も見つからず、我が家の一員になったオスの三毛猫の名前は「王子」と決めた。

程なくしてその最愛の「王子」も亡くなり、現在は犬3匹（トイプードル）との共同生活だ。私たち家族が今までのペットとの暮らしの中で、どれほど多くのことを教えられ、恩恵を受けてきたか改めて考えてみたい。

1. 迷い込んだ三毛猫

我が家の一員として迎えられた三毛猫。名前は男の子だから「王子」と妻が名付けた。性格はとにかく我聞せず、何時もマイペース、日中も殆ど居間のソファに陣取り寝てばかりいる。ある時、庭の方からけたたましい鳥の鳴き声と羽ばたきの音が聞こえ、慌てて表に出てみると、あの大人しい「王子」が凄い形相で獲物にしゃぶりついている。程なくして、何事もなかったように部屋に入り、また転寝を始めた。庭には食べられてしまった雀の羽が散乱したままだ。私も妻も顔を見合わせ、猫とは言っても「獣」の本性に呆然とするばかり。

私がお社から帰り、寛いでいると必ず膝の上に乗ってきて転寝を始める。寝る時も布団に潜り込んできて、温かい体を寄せてくる。無性に可愛く、どれほどストレスや不安が癒されたことか。しかしそんな平凡な温かな日々はそう長くは続かなかった。王子の元気がなく、鼻水を垂らすことが多くなり、病院での診たては風邪。処方箋に従って、何日間か様子を見ていたが一向に改善が見られない。他の病院で再度検診してもらうと、猫免疫不全ウイルス（FIV）に感染しており、現代の医学では一旦感染すると完治することはできないとのこと。FIVは喧嘩で噛まれたりすることで感染することが多く、一度感染するとゆっくり年月をかけて進行し、最後には死に至るといふ恐ろしい病気だ。王子の元気がない様子を見ながら、私も妻も娘も泣くことが多く、ちょっとした王子の仕草を見ては愛おしく、また涙が出てしまう。奇跡を信じていたものの叶う筈もなく、ある日曜日の休診日、院長の計らいで診察を待っていた時、妻の膝の上で、少し目を開いたか

と思うと、それを最後にまた目を閉じた。王子7歳、あまりにも早い生涯に幕を閉じたのだ。

「我が子」を失い、日常の生活で妻から何時もの賑やかさと笑顔が消えた。私達家族にとって、失ったものがあまりにも大き過ぎたのだ。

2. 娘が連れてきたトイプードル

「我が子」を失った傷心も大分癒された頃の11月の寒い夜、当時大学生だった娘から電話があり、「荷物があるのでガレージまで取りに来て欲しい」と。積み込んである黒い大きなバッグを肩にかけて歩いた瞬間、バッグの中で何かがグラッと2、3回揺れたのだ。恐る恐る中を開けてみると、なんと片手に入りそうな小さな愛らしい犬、トイプードルだ。部屋で放してみると、愛くるしい目を一杯開けて、あたりをぐるぐる見回している。「クーン！クーン！」と悲しい鳴き声。ミルクも飲まない、近くにあったゴルフボールを転がしてみても無反応だ。抱っこしようとしても、するりと手からすり抜けてしまう。私も妻も悲しい鳴き声を聴きながら、その晩は一睡もできなかった。

生後5ヵ月の男の子、体重は1kg、色は茶色、短い尻尾がりボンのようについている。訳も分からず遠く船橋の地まで、突然にして孤独の地に投げ込まれてしまったのだ。一晩中その鳴き声を聞きながら、私は涙が出て止まらなかった。まだ名前もないその子犬は、不安に慄きながら、必死に母親の匂いを求めているのだろうか。

次の日、会社から帰ると、真新しいゲージが用意され、遊び道具も与えられ、無邪気に動き回っている。名前は「アライ」、ハワイ語で王族という意味らしく、



写真—1 アライと名付け親(妻)

フラダンスの先生でもある妻が付けた。僕が名付け親になりたかったのだが仕方ない。

「アライ！アライ！僕は今日からあなたの父親になります！世界一優しい父親になります。」

アライが来てから6年後、アライだけでは遊び相手もなく可哀想と、今度は妻がグレーのトイプードルを譲り受けてきた。更にそれから1年後、結婚した娘が茶色のトイプードルを飼った。ある時、娘がそのトイプードルを我が家に連れてきて、その日以来、我が家に居候状態だ。かくして、我が家は妻と3匹のトイプードルとの賑やかな生活が続いている。

毎日、なんと充実していることか。毎朝会社に出かける時は、悲しい「クーン」の声に後ろ髪惹かれる思いで見送られ、帰ると毎回3匹の狂喜乱舞に迎えられる。犬は寂しがり屋なのだ。休みの日は散歩が何よりの楽しみ。特に天気の良い日、3匹連れ立っての散歩は爽快だ。見ず知らずの人とも散歩を通じ、言葉を交わすようにもなった。



写真—2 筆者と寛ぐ3匹

一昨年、97歳で亡くなった私の母も、この3匹と遊ぶのが何よりの楽しみで、お陰で母は幸せな晩年を過ごすことが出来たと思っている。

アライは、今年の5月で15歳になる。人間でいえば76歳過ぎだ。食欲もあり健康だが、以前より寝ている時間が多く、動きも緩慢だ。これからのことに心構えも整理ができていづもりだが、この幸せが永遠に続いてほしいものである。

3. ペットとの暮らしを考える

ペットを飼うということはどういうことか。ペットにとっての飼い主は「命」を預けている存在であるということを認識していなければならない。即ち、「ペットの命に責任を持ち、日々向き合う」ことである。

ペットを飼う前には、いろいろと考えるべきことがある。適切な居住環境、食事、健康管理、適切な躾はもちろん、経済的なことも考えに入れなければならない。ドッグフード、躾時のおやつ代、ペット保険、病院での健康診断(各種ワクチン含む)、毎月の散髪代(トイプードルは季節性の換毛期はなく、散髪が必要)、排泄等の処理シート、寒い時の衣服代などなど、年間数十万円が必要である。

しかし、ペットを飼うことによって、私たちの生活がどれほど豊かなものになったか。心配事は多くなったが、無邪気に遊ぶその様子を見ていると、改めて「命」に向き合う責任を強く痛感する。子供が巣立ち、現在二人だけの生活だが、3匹の子供たちのおかげで、賑やかな充実した毎日を過ごさせてもらっている。

イギリスの古い諺に「子供が生まれたら犬を飼いなさい」というのがある。

- ・子供が生まれたら犬を飼いなさい。
- ・子供が赤ん坊の時、子供の良き守り手となるでしょ



写真—3 庭石の上で日向ぼっこ

う。

- ・子供が幼年期の時，子供の良き遊び相手となるでしょう。
- ・子供が少年期の時，子供の良き理解者となるでしょう。
- ・そして子供が青年になったとき，自らの死をもって子供に命の尊さを教えるでしょう。

作者は不明だが，多くの人々の胸に刺さり，今でも語り継がれているとのこと。

5歳の孫娘が毎週のように泊まりに来て，アライ達と遊んで行く。アライ達との関わりを通し，もっと優しい心，慈しみの心が育てばと願っている。

アライは今や高齢犬だ。遠からずその「死」に直面することになる。そこから孫娘は本当の「命の尊さ」を学ぶことにもなる筈だ。

—さとう かずろう 大成建設(株)
クリーンエネルギー・環境事業推進本部 顧問—

